

『源氏物語』 桐壺卷 「いとまばゆき人の御おぼえなり」 の解釈とその指導について

早 乙 女 利 光

一 はじめに―「いとまばゆき人の御おぼえなり」の
解釈上の問題点―

上達部、上人などあいなく目を側めつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかる事の起こりにこそ、世も乱れあしかりけと、やうやう、天の下にも、あぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃の例もひき出でつべくなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひたまふ。(桐壺巻)

桐壺帝の桐壺更衣に対する愛情の深さを物語る桐壺巻冒頭部分である。「あいなく目を側めつつ」、「楊貴妃の例」などの叙述から、『源氏物語』における漢籍受容の一端がうかがい知れる場面として広く知られており、考察対象となってきた。しかし、それ以外にも当該部分には看過できない解釈上の問題点が含まれてい

る。

傍線部分の「いとまばゆき人の御おぼえなり」をどのように解釈するか、限定すれば「人」が誰を指すとすべきか、ということである。あるいは自明なことだという訝りを受けるかも知れない。稿者も「人」は桐壺更衣以外に解釈の余地がないと考えてきた。しかし勤務校において『源氏物語』を高校三年生に講じていた同僚が、中間考査の問題の一作として当該箇所を解釈を生徒に問い、「人」は桐壺帝である、という解答を提示したと知った。その上、半数以上の生徒が「人」は桐壺帝であると答え、「人」を桐壺更衣であると答えた生徒も、教師に疑問を差し挟まなかったということである。無論、授業中に教師が「まばゆき人の」の解釈を提示しているはずであるから、それを暗記していた生徒が教師の誤った解釈を鵜呑みにしただけであるのだが、だからこそ恐ろしいのである。勤務校の生徒達は概して優秀である。指示されたこ

とはそつなくこなす。だが、自分で考えない。それは程度の差こそあれ、いずれの学校の生徒も同様であろう。そのような生徒たちを日々相手にしている我々は、細心の注意を払って授業をすべきである。一語一語の解釈を厳密に問うというのも、より良い授業を展開する上で欠くべからざることである。

まずは現行の注釈書がどのような解釈を提示しているか通覧しておく。

現行の注釈および現代語訳

A 「人」を更衣とするもの

①上達部上人「御おほえなり」公卿や殿上人も、わけもなく目をそむけるといつた、正視出来ぬ程の御寵遇だ。「人」は更衣をさす。(日本古典全書『源氏物語』朝日新聞社、一九四六)

②人の御覚え「人」は更衣をさすのだが、かかる場合は「人の御覚え」で一の熟した詞と見る。(吉澤義則『対校源氏物語新釈』平凡社、一九五四・二)

③(一)人の御おほえなり「更衣の御思われ(帝からの寵愛(日本古典文学大系『源氏物語』岩波書店、一九五八)

③(二)「人の」は「更衣の」とあるべきを、抽象的に「人の」とした。「略」故に「人の御おほえ」を一単位の如く扱って、それに「いとまばゆき」を添える。「いとまばゆ

き」は、実は「人」にかからず、「御おほえ」にかかる。
③の補注10)

④人の御おほえなり「御おほえの人なり」と同じだが、特に「御おほえ」を強調させた表現。(洪沢栄一氏「源氏物語の世界」<http://www.sanetorji/~eshibuya/>)

B 「人」を桐壺帝とするもの
なし

C いずれの解釈が曖昧なもの(もしくは明示していないもの)

⑤実に見ていられない御寵愛ぶり(玉上琢弥氏『源氏物語評釈』角川書店、一九六四・十)

⑥まばゆき人「まぶしいばかりのおん思われ。『見てはいられない』の意がこもる二重の表現(新日本古典文学大系『源氏物語』岩波書店、一九九三・一)

⑦(一)まったく正視にたえぬ寵愛ぶりである。(新編日本古典文学全集『源氏物語』小学館、一九九四・三)

⑦(二)「人の御おほえ」で一続きの語(⑦の頭注)

⑧とても見てはいられないほどのお気に入りようである
『源氏物語の鑑賞と基礎知識 桐壺』至文堂、一九九八・

十)

現行の注釈書ではさすがに「人」を桐壺帝と解釈しているものは皆無である。しかし、直近の注釈書である⑥、⑦、⑧が「人」の解釈を訳注で明示していない。新全集の頭注はわかりやすいとは言えまい。新大系や新全集は教育現場で参照されることも多く、稿者の同僚の誤釈の因は両書のうちいずれかを参考としたためである。特に大系が補注で詳しく説明していただけない、新大系が「人」の解釈に触れていないことは疑問である。校注者が同一ではないためであろうが、新大系の校注者は「人」の解釈に疑義を持ったのか、それとも注の必要性を認めなかったのかいづれかと考えるしかない。前者であるとすれば、新見を提示すべきであるし、後者だとするならば、古典愛好家、教育現場のどちらに対しても不親切というしかあるまい。

教師ですら誤読をしてしまう。まして高校生が難なく読解できる箇所ではない。まずは、新大系、新全集の改版の際には是非とも「人」が桐壺更衣である旨を注で明示して頂きたい。

しかし、本稿の主旨は直近の注釈書に注意を喚起することにあるのではない。問題は、「人」を桐壺更衣とする注釈書も大系の補注以外は、明確な根拠を示していないことにある。初学者である高校生を対象に古典を講じている現場の人間には、当該箇所のように解釈が困難な箇所は明確にわかりやすく説明する責任が生じる。

本稿では高等学校で当該箇所を講じること念頭に、大系補注とは異なった角度から「人」がなぜ桐壺更衣を指すのかという説明を試みたい。

二 「まばゆし」の用例

本節では、桐壺巻における「まばゆき」をどのような意味で解すか、また実際「まばゆし」という形容詞はどのような語感を伴うものであったかを考察する。

まずは、古注および一で引用した以外の注釈書における「まばゆき」の解釈を通覧する。

①まはゆきⅡ善惡に通ずる辞也正鉢にむかはぬ心有『弄花抄』源氏物語古注集成、一九八三・四

②まはゆきⅡ善惡に通ずる詞也正鉢に向ハぬ心也『一葉抄』源氏物語古注集成、一九八四・三

③まはゆきⅡ人のそねみてうちもむかはさる貞也『内閣文庫本 細流抄』源氏物語古注集成、一九八〇・十二

④まはゆきⅡ人のそねみて打も向はぬ貞なり『明星抄』源氏物語古注集成、一九八〇・十二

⑤まはゆきⅡ正鉢に向はぬ心也いやなる心也『休閑抄』源氏物語古注集成、一九九五・二

⑥いとまはゆきⅡ善惡に通ずる詞也正鉢にむかわぬ心也『孟津抄』源氏物語古注集成、一九八〇・二

⑦まはゆき人の御おほえなりⅡ碩禁中にもありかたきさまをいへりつねにはれ／＼しき事をいへりこゝは其儀にはあら

ざる歟 弄善惡に通ずる詞也 細人のそねみてうちもむかはざる白也 (『萬水一路』源氏物語古注集成、一九八八・二)

⑧いとまばゆき人の弄正躰にむかはれぬ心也 善惡に通ずる也 箋御寵愛のはなはたしきをそねみたるさま 人のかたふきそむきたるはうちもむかはれぬをいへる歟 (『岷江入楚』源氏物語古註釈叢刊、一九八四・六)

⑨まばゆきゝなべて人に目をそばめらるる、これまばゆきなり (北村季吟『源氏物語湖月抄』講談社學藝文庫、一九八二・五)

⑩いとまはゆきゝまはゆきは餘りにきら／＼しき御もてなし也といふ也、まはゆきは日のきらめくに向ひかたきより何にてもさる類にはいへり (賀茂真淵『源氏物語新釈』賀茂真淵全集、一九二七・八)

⑪まばゆきゝ拾遺に、日のかゝやく時、まばゆくて、見がたきやうの意なるべきにや、といへるごとくにて、なべて人に目をそばめらる、これまばゆき也 (本居宣長『源氏物語玉の小櫛』本居宣長全集、一九六九・十)

⑫めをそばめつゝ、あしくきはしき物を見る時のさま也 (萩原広道『源氏物語評釈』国文註釈全書、一九〇九・十二)

『弄花抄』以降、善惡どちらの場合にも使用する語句として、
「正視できないほど程度が甚だしいさま」と把握されてきた。無

論、当該箇所は「目をそむけたくなるほど程度が甚だしくひどい」という意味である。当該箇所の直前に叙述されている「あひなく目を側めつつ」が『長恨歌伝』の

而も恩沢勢力は、則ち又之に過ぐ。禁門に出入すれども問はず、京師の長吏も之が爲に目を側つ。(陳鴻「長恨歌伝」)

新書漢文大系『唐代伝奇』明治書院、二〇〇二・七)

を典拠としていることを鑑みれば、古注などの見解は首肯できよう。都の高官は楊貴妃への帝の寵愛をよいことに好き放題をしている楊国忠一派に対して目を背けたのである。

『源氏物語』当該場面を同様に解釈すれば、上達部、殿上人は帝の寵愛を独占している桐壺更衣に対して「まばゆく」感じていゝるということになる。帝の行為に目を背けているわけではない。以上の解釈を踏まえて、『源氏物語』中から同様に解することが出来る用例を示しておく。

①大将の御前驅を忍びやかに追へば、しばし立ちとまりて、「白虹日を貫けり。太子畏ちたり」と、いとゆるるかにうち誦じたるを、大将いとまばゆしと聞きたまへど、咎むべきことかは。(賢木卷)

②帝、思し寄する筋のこと漏らしきこえたまひけるを、大臣、いとまばゆく恐ろしう思して、さらにあるまじきよしを申し返したまふ。(薄雲卷)

③みづからも、大殿を見たてまつるに気恐ろしくまばゆく、

かかる心はあるべきものか、なのめならんにてだに、けしからず人に点つかるべきふるまひはせじと思ふものを…
(若菜下巻)

④さてもいみじき過ちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれ一略一この院に目を側められたてまつらむことは、いと恐ろしく恥づかしくおぼゆ。(若菜下巻)

⑤ただ今しも人の見聞きついたらむやうにまばゆく恥づかしと思さるれば、明かき所にだにえぬざり出でたまはず。いと口惜しき身なりけりとみづから思し知るべし。(若菜下)

⑥かの御心にかかる咎を知られたてまつりて、世にながらへむこともいとまばゆくおぼゆるは、げにことなる御光なるべし。(柏木巻)

⑦本の心を知らぬことなれば、とり散らし、何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやと思す。(柏木巻)

以上、本稿の考察対象と同様に解しうる「まばゆし」の例を取り上げてみたが、共通していることは、時には生存することすら憚られるほどの尋常でない悩みの表出するために使用されているということである。①は桐壺院が崩御した後、右大臣一派の専横が始まり、光源氏の立場が非常に危ういものとなっている時に、

光源氏の姿を見た弘徽殿太后の甥である頭弁が『史記』雋陽伝の一節を朗詠する場面である。あたかも光源氏に謀反の兆しありと言わんとしているようであり、光源氏は目を背けたくなるほど苦々しく思っている。②は出生の秘密を知った冷泉帝が光源氏に讓位を仄めかす場面である。光源氏はあまりのことに恐懼して顔を上げられずにいる。その胸のうちには桐壺帝に対する贖罪と藤壺との宿命的な縁という交錯する思いが去来していよう。③④⑥は柏木の女三宮への思慕が昂じて密通に至つた後に、柏木、女三宮両者が光源氏を恐れてこのまま生きながらえることが憚られるほど悩む様子が描かれている。興味深いのは④の例であり、柏木は光源氏から「目をそばめられ」るのが恐ろしくて「まばゆく」感じている。つまりは「目をそばめらるる人」Ⅱ「まばゆき人」なのである。桐壺巻の用例も同様に解して、「まばゆき人」は「目をそばめられ」ている桐壺更衣であると考え得る。

⑦は、③④⑥で「まばゆく」感じる主体が柏木であったのに対して、薫の五十日の祝いを無心に執り行っている周囲の人々を見て、密通の真相を知ってしまった光源氏が目を背けたいほどの思いを抱く場面である。

以上の用例を通覧して理解されることは、桐壺巻当該場面と同様に「目を背けたくなる」と解し得る「まばゆし」は、「まばゆし」と感じる主体にとって非常に重大な結果をもたらすものとして意識されているということである。

次節では「人の十御おぼえ」の用例を通覧しておく。

三 「人の十御おぼえ」の用例

もし、「まばゆき人」が桐壺帝であるとするならば、「人十御おぼえ」の「人」は寵愛する主体であらうし、更衣であるならば当然のごとく、「人」は寵愛される対象を表すことになる。

①「亡きあとまで、人の胸あくまじかりける人の御おぼえかな」とぞ、弘徽殿などには、なほゆるしなうのたまひける。
(桐壺卷)

②この大臣の御おぼえいとやむごとなきに、母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、いづ方につけてもいとはなやかなるに：(桐壺卷)

③尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを、かくひきかへめでたき御幸ひにて、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる。(漣標卷)

④春の上の御おぼえに並ぶばかりは、わが心ながらえあるまじく思し知りたり。(常夏卷)

⑤「中将の、いとさいへど、心若きたどり少なさに」など申したまふも、いとほしげなる人の御おぼえかな。(常夏卷)

⑥「いで、あなかも、たまへ。みな聞きてはべり。いといと

ほしげなるをりをりあなるをや。さるは、世におしなべたらぬ人の御おぼえを。ありがたきわざなりや」といとはしがる。(若菜上卷)

⑦親王の御おぼえいとやむごとなく、内裏にも、この宮の御心寄せいとこよなくて、このこと奏したまふことをばえ背きたまはず、心苦しきものに思ひきこえたまへり。(若菜下卷)

⑧大將も、さる世の重しとなりたまふべき下形なれば、姫君の御おぼえ、などてかは軽くはあらむ。(若菜下卷)

⑨后の宮の御おぼえの年月にまさりたまふけはひにこそは。などかさしも、と見るまでなん。(匂兵部卿卷)

⑩げに、ただ昔の光る源氏の生ひ出でたまひしに劣らぬ人の御おぼえなり。(竹河卷)

⑪この御事をば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。(宿木卷)

⑫右大臣も、「めづらしかりける人の御おぼえ宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。我

は、まして、人もゆるさぬものを、拾ひたりしや」(宿木 巻)

①は桐壺更衣亡き後、弘徽殿女御が悲嘆に暮れる桐壺帝を見て、その愛情の深かったことに嫉妬している場面である。弘徽殿女御の鬱屈の原因は、桐壺更衣を愛した帝ではなく、愛された桐壺更衣にある。「人の胸あくまじかりける人」とは無論、桐壺更衣のことである。②は帝の左大臣に対するご寵愛の並々ならぬことを述べている場面である。③は光源氏の玉鬘に対する、④は光源氏の紫の上に対するご寵愛という意である。⑤は内大臣の近江の君に対する寵愛について述べている。⑥は女三宮に対する父である朱雀院の寵愛という意である。⑦は紫の上の父でもある式部卿宮に対する帝の信頼が並々ならぬことを述べている。⑧は、真木柱に対する世人の評判が重々しいことを述べている。⑨は冷泉院の秋好中宮に対する御寵愛が年々深くなっているという意である。⑩は薫に対する冷泉院をはじめ、世の人々の寵愛という意である。⑪は勾宮に対する帝及び明石中宮の寵愛のことである。⑫は薫に対する帝の信望が驚嘆すべきほどであることを述べている。以上の用例を通覧すれば、全てにおいて「人」は寵愛される対象を指示していることが明確となろう。特に興味深い用例としては①、⑤、⑥、⑩、⑫である。この五例は「人の属性(説明)＋人＋御おぼえ」となっており、「まばゆき人の御おぼえ」と極めて類似している。

四 まとめ―一語一語の解釈を大事にする授業―

以上、様々な角度から「いとまばゆき人の御おぼえなり」について考察してきた。結果として、「人」は桐壺更衣を表し、上達部、殿上人たちの「まばゆき」＝目を背けたくなるほどの嫌悪感、分不相応に寵愛されている桐壺更衣に対して向けられていることを明らかにした。二節で考察したように、当該考察場面の「まばゆし」とは主体にとつて切迫した事態が想起される際に使用される語であり、厳格な階級制度の中でこそ存在価値がある上達部、殿上人たちにとつて、身分の低い者が寵愛される事態は自らを否定されることに等しかったであろう。また、娘を入内させている者たちにとっては、桐壺更衣が帝の寵愛を独占することで、自分の一族が帝の外戚となる可能性を絶たれたという恨みも生じる。

それらが桐壺更衣に対する嫌悪に繋がっているのである。誤読をせぬために注意せねばならないのは、彼らは先述したように厳格な階級制度の中に生きていた。ゆえに、桐壺更衣を寵愛する帝の行為を否定する言動はあり得ないということである。

三節では当該考察場面と同様の構造を有する「人の十御おぼえ」を通覧し、全ての用例が「人」＝寵愛される対象であることがわかり、文構造の面からも「人」が桐壺更衣であることが証明された。

当該場面が誤読を誘発しかねないからこそわかりやすく生徒に説明しなければならない。それは豊様な作品世界は一語一語の厳密な解釈の上に成り立つことを理解させることに繋がるのである。残念ながら当該場面の解釈に関する限りは現行の注釈書の注釈、

現代語訳では物足りない。そこで、当該考察場面を授業で扱う際には、本稿の二、三節で引用した用例を併せて提示することを提案する。

「まはゆき人の御おほえ」の解釈を糸口にして、桐壺更衣が四面楚歌の状況の中で次第に追いつめられていく過程を生徒たちに感じ取らせることができればよいと願っている。

本稿の提案に対して日々の授業に奮闘されておられる中学校・高等学校の先生方をはじめ、大方のご叱正を賜りたい。

注

(1) 以前、拙稿でこの点に関して述べたことがある。『古典教育論』のあり方に関して「教材価値の模索」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊1212・2004・32)

*『源氏物語』本文の引用は小学館新編日本古典文学大集による。

(学習院女子中・高等科)